

災害が育んだ日本人の精神性

ながれ

新井田 裕治 (にいた ゆうじ / NPO エコワーク実践塾 副理事長、仙台市在住)

震災当時、私は宮城県気仙沼市に赴任中でした。津波を目の当たりにした衝撃と朝になっても鎮火しない湾内の火災の記憶、そして高台にある社員の実家で10数名が2名毎に毛布1枚に包まって、体温を感じながら朝まで雑魚寝した記憶は、今でも鮮明に思い浮かびます。それから早いもので11年半が経過しました。宮城県沿岸部の復興事業も一巡して、震災直後に比べると大きく様変わりしています。

震災を経て、宮城県内で新たに「持続可能なまちづくりをしたい」と事業を立ち上げた事業体は多くあります。その中でも、ゼロスタートで環境に配慮した仕組みづくりに挑戦して順調に推移している2社をご紹介します。

●新しい事業体で順調に推移している2社

1社目は、閉塞感の目立つ商店街の活性化を図りながら「三方良し」の精神で「持続可能な地域づくり」を実践している「気仙沼地域エネルギー開発株式会社」です。

自伐林業家養成塾「森のアカデミー」を開催しながら地元林業家や森林組合に働きかけ、放置山林の間伐材を「地域通貨(リネリア)」で買い取り、それを受け取った人が商店街で買い物のできる「地域通貨の循環」を作りだそうとしていることが特徴です。

間伐材を中心に木質バイオマス発電を推進して800Kw/hの発電を行い、近くのホテルへの温水供給も行っています。

海と水産の町というイメージの気仙沼市ですが、実は約70%が森林です。国産材がコスト面で住宅に使われなくなって、山に手が

加えられずに荒れているのが現状です。

荒れた山林はCO₂の吸収も少なく、栄養分も海に流れません。「森は海の恋人」と例えられるには程遠く、水産業(養殖業)にとっても「放置山林」は課題でした。その解決に向けた事業がこれです。

なお、現在に至る詳細については、下記HPをご覧くださいと思います。

*URL: chiiki-energy.co.jp

2社目は、気仙沼市の南に位置する南三陸町で「生ごみ資源化事業」を行い軌道に乗せている環境関連大手のアミタHDの子会社「アミタ株式会社南三陸Bio」です。

南三陸町の「バイオマス産業都市構想」に沿って事業協定を結び、60数回以上の住民説明会を開催した上で、2015年よりスタートしています。南三陸町のごみ集積所260ヶ所から集めた生ごみと町衛生センターからの余剰汚泥を「南三陸Bio」の施設で発酵処理をしてバイオガスと液体肥料を製造しています。発電電力は、施設内で使用すると共に、液肥は町内で分けられ地元農地に散布されます。

[2021年実績]

- ・年間発電量：9万4,400Kw/h
- ・液肥製造量：4,500t

こちらは、< YouTube >の動画でぜひ、ご覧になっていただきたいと思います。

「いのちめぐる～南三陸Bioのこと～」

「いのちめぐる メイン」

●被災直後の復興作業の実際

気仙沼市の震災での死者・行方不明者は1,357人で、被災家屋は15,815棟（平成27年現在）に上りました。被災直後の各行政・自衛隊・企業・各商店の状況と動向を簡単に紹介すると下記の通りです。（個人的な感想も入っています）

○市役所

（本庁舎は被災なし、出先は被害あり）

各部署それぞれ大変だったと思われます。特に避難所開設や支援物資の分配等にご苦労があったと思います。社会福祉協議会は、多くの福祉施設の被災、ボランティアの受け入れと現場の振分け指示、支援金の配布等で特に忙しかった様です。

○警察

（本庁舎は津波で被災、仮庁舎で業務）

地元警察は、身元不明者確認等で手いっぱいの状況で日常業務の遂行が難しく、応援の関西ナンバーのパトカー（特に大阪ナンバー）が巡視・警戒業務を行っていました。

○消防

（本部は被災なし、各分署は被害あり）

救助活動、消火活動で手が回らず、鹿折（ししおり）地区の大規模火災は、東京消防庁から応援の消防車が10台以上来て消火活動を行いました。（消防防災ヘリが活躍）

○自衛隊

（自己完結できる自衛隊は、頼りに）

長崎・大分・福岡の各自衛隊が、搜索活動・炊事給食・物資輸送・医療・入浴支援を行いました。

○各企業・商店

（水道・電力・通信は、例外を除き全て停止）

海に近い地区は、すべて被災し、残った商店・ガソリンSS・LPG充填所は、各々で役割分担のもと仮設商店街の準備、緊急車両や

病院向けの燃料の確保、LPガス充填作業の集約化を図りました。（市内のSSは半数が被災、LPガス充填所は2か所のみ残る）

●震災の様な大きな変化がないと

環境意識も変わらないのか？

上記のような状況下で、困難な生活環境のもとでも、毎日スーパーに整然と長蛇の列をつくり、開店を待つ人々の姿や避難所で互いに助け合う姿、企業・商店の互いに融通し合い協力する姿など、前向きに逆境に取り組む姿勢を見るにつけ感じたことは、「日本人の精神性のかなりの部分は、災害やそれを乗り越えることで養われて来た」との思いでした。

当時、小学校高学年から高校生までの多感な時期に震災にあい、避難生活やトラブルも含め被災を体験した子供達は、現在20歳台前半から後半で、社会で最も活動的な世代になっているはずで、彼らは、皆で助け合う「互助の精神」の大切さを自ら体験し、十分理解していると思います。現在、若者を含め世間一般には、資本主義の負の部分が目立ち「今だけ、金だけ、自分だけ」「人を騙しても自分だけ良ければよい」との風潮があることも事実です。

しかし、これからは、お金やGDPに換算できない「日本人の互助の精神」を大切に「持続可能な地域づくり」を行う時だと思っています。いつまた大きな災害が起こるかわかりません。

一方、欧州の戦禍は、温暖化等の環境問題を複雑化して、混迷の時代になって来ています。

そうした中であっても、今は「互助の精神」と「起業家精神」を併せ持つ若者達に特に期待しながら、微力でもカーボンニュートラルを少しでも前進させたいとの思いを強くするこの頃です。